

片想いの恋愛感情が両想いに発展していくコミュニケーションの研究

学籍番号:A63121番 氏名 田島 恵

【はじめに】

この論文は、恋愛という実体の無い、いつ誰に訪れるか分からないドラマ的とも思える瞬間を向えるメカニズムを解明する内容といえる。つまり、一般にどのような時・どのような相手に恋心を抱くのか、又、恋心を抱いた際に相手へのコミュニケーションとしてどのような言動が一般的に適切なのか、ということを解明していく。必ずしも有効なコミュニケーションとは断言できないが、少しでも盲目になりがちな思考が冷静を保てるように参考にしてもらいたい。

近年までで研究されてきている内容に、恋愛場面で有効なコミュニケーション方法については研究されていない。主に研究されている内容は、各場面での恋愛感情の芽生えの有無・恋愛関係の崩壊が与える思考の変化・学生の恋愛観についてが主である。恋愛が青年期に与える影響は大きい。時にはうつ病を引き起こす者がいるほどである。そんな恋愛が円滑に進む方法があるとするなら、恋心を抱く相手ができるときにその悩みを軽減できるのではないだろうか。私生活から切り離して考える事のできない恋愛だからこそ、少しでも前向きに関わっていけるように本研究は重要なのではないかと考える。

【研究史】

一概にどのような感情も愛と断言することができない。愛には S.S.ヘンリック, C.ヘンドリック(2000)の唱える“理想主義と現実主義”, “融合と結合”, “贈与と評価”という3つの視点と、松井(1996)は Lee の研究結果として、ルダス・マニア・プラグマ・エロス・ストーゲイ・アガペという類型があると主張している。その類型全てを総称して、人間は愛と呼ぶ。

先行研究で示されているが、好意感情と恋愛感情は区別されるものである。ルービン(1970)の研究では、男性の場合は恋愛感情と好意感情を明確に区別しておらず、女性の場合は恋愛感情と好意感情を明確に区別している、という結果が出た。このことに関しては山本(1986)も同様の意見を主張している。しかし、その結果とは異なる意見を示しているものもある。それは、中西(2003)による好意感情と恋愛感情の混同に関する論文である。中西は、男性の場合は好意感情(相手への信頼)無しに恋愛感情が芽生えることは十分にありえる。その一方で、女性の場合は好意感情無しに恋愛感情が芽生える可能性は極めて低い、と主張している。

恋愛心理学は、社会心理学・青年心理学の分野が研究対象の大半を占めている。社会心理学では、質問紙調査を中心として実験や面接調査が行われている。社会心理学の視点では、恋愛は対人との関わり方の1つとして取り上げられているのだ。青年心理学では、主に文学の内容分析・青年の手記分析が行われている。青年心理学の視点では、恋愛は感情の芽生えに強く影響をもたらす重要な役割を担っていると考えられている。又、その一方で、精神不安定の要因にもなりうる、という考えも示して研究されている。恋愛は青年を成長させる。上記でも述べたが、恋愛は幾多もの感情の芽生えに大きく関わっている。そのため、恋をすると心に幾つかの変化が現れる。それは主に、理想化・同調作用・憑執傾向・共存感情・克服・成長というものである。

【目的】

本研究では、恋愛場面における有効的なコミュニケーション方法について調べることを目的としている。過去・現在における恋人との恋愛関係になるまでの過程・理想と現実の相違を調べ、どのような男性・女性が異性から恋愛的好意を向けられるのかを明確にしていく。又、どのような言動が恋愛的好感を上げる要因になるかについても、明確にすることを目的としている。

【方法】

調査対象者は、10代後半・20代全般の男女。主に大学生。人数は全員で11名。内訳は、男性が4名・女性が7名となっている。調査対象者の基準は、今までに1名以上に恋愛的行為を向けられたことがあることが条件となっている。実際に告白をされていなくとも、被験者自身が自分に恋愛的好意を抱いていると感じればこの条件に当てはまるものとする。又、恋人がいたことに対する有無は問わない。調査方法は、質問紙と面接法を用いて行った。質問紙では、林(1978)の特定形容詞尺度・藤原, 黒川, 秋月(1983)のLove-Liking尺度を用いて行った。特定形容詞尺度では対人認知について調べた。

【結果】

恋心を抱く相手との性格、雰囲気といった項目は、恋愛においてあまり重要ではないことが判明した。しかし、出会ったころの印象よりも、親しくなったからの印象が自分に似ていないと感じれば、親近感生まれず、深い仲になっていくことは困難と考えられる。自分に似ていればそれだけ親近感が生まれる。始めに感じた親近感の度合いが離れれば離れるほど、関わりを深くすることが難しくなるのだ。これは面接においても同様の結果が出ている。自分と自分に恋心を抱く相手との類似についての回答項目数は低かった。恋愛的好意は、社会的信頼に比例して芽生えやすいことが判明した。個人間での信頼とは別に、社会的視点からの信頼感は恋愛で大きく関わっていた。例えば、学級委員長に推薦したい相手、というように、責任ある立場にふさわしいというような相手に恋愛感情は芽生えやすい。これはLove尺度では評価が低い相手でも、Liking尺度で評価が高い相手と恋人関係になっていることから見て取れる。これは面接においても同様の結果が出ている。女性の7名中2名が信頼感の無い相手へマイナスの印象を受けている。

【考察】

近年の大学生にとって、恋愛は重要な役割を示している。被験者の中に、恋人がいないことへの劣等感を抱えているものもいた。そんな感情から、恋愛的好意を向けていない相手であっても恋人になってしまうことがある、と本研究で証明された。しかし、恋心を抱く前であったとしても、恋心を抱けるかもしれない精神的距離が離れてしまう寂しさを感じるからこそ、恋人になる被験者が11名中7名と大半を占めていた。このような感情を抱かせることが、恋愛における有効なコミュニケーションなのだ。男性の場合、全員一致で女性に博愛ともいべき広域にわたる優しさに魅力を感じている。また、頼られることによって自尊心を高められ喜びを与えることも出来る。頼られることに喜びを感じると回答した被験者は、頼られることに大きな喜びがあるとも回答している。しかし、一方では4名中3名は理想の外見に近い者に恋心を抱いた。理想の内面よりも、理想の外見の項目のほうが過去・現在の恋人像に近いという結果が出ている。よって、男性に恋愛場面で有効なコミュニケーション方法としては、恋心を抱いた男性の外見での恋愛的个人の好みを調べ、髪型・服装をそれに近づける。その上で、相手と接触する際には穏やかな優しい印象を与えつつ、あなただから頼る、という趣旨で相談事をする・悩みを話す・お願いをすることが挙げられる。女性の場合、男性とは対照的に7名中6名が理想の外見とはほぼ真逆のタイプと過去・現在で恋人関係になっている。そして、同様に7名中6名が理想の内面とほぼ一致している相手と過去・現在で恋人関係になっている。これは大学生の結婚への意識が関係していた。つまり、恋愛をして結婚した際に、理想とする家庭を築いていくのにより最適な人間性の持ち主を恋愛対象としていいると考えられる。よって、女性に恋愛場面で有効なコミュニケーション方法としては、まめな恋愛のアプローチを続けると共に、言葉にしない表情や仕草などに表れる感情の変化を察知して言葉や行動で気を使うということが挙げられる。

【参考・引用文献】

- ・ 松井豊 1993 セレクション社会心理学「恋ごろの科学」(株)サイエンス社
- ・ 齋藤勇 1999 恋愛心理学 川島書店
- ・ S・S・ヘンドリック, C・ヘンドリック 2000 「恋愛学」講義 金子書房